

七荒木田二段二百五十步中

右坪一百八十步見熟作依知安雄二段七十歩入遠江搥宅雖前使勘決都不伏理今任理勘伏令進地子

勘收
貞觀元年十二月廿五日使學頭延保

學頭
學頭「去豐」

本書は東大寺成卷文書中に納められている貞觀元年(869)十二月二十五日付の近江國依智庄檢田帳である。まず目錄をあげ、ついで同庄の成立の由來と耕作百姓らの恣意横暴により當時の經營が亂れていたことをのべ、以下それを檢田使延保が八條九里、九條八・九・十里、十條七・八里、十一條七・八・九里の中の十八ヶ坪について各坪毎に嚴重に檢田し、強力に處置した事情が問答式の直接語法で活き／＼と描かれている。文面には「元參論印」が八つ押され、最後に檢田使學頭延保と勘收した學頭去豐、別當圓宗ら數人の署名がある。依智庄は滋賀縣愛知郡豐國村を中心とし一部西

押立村に及ぶ地域に、散在耕地の買得により天平勝寶五六年頃に元興寺領として成立を見、東大寺に繼承された莊園であり、愛智庄、愛知庄とも書かれている。先進地帯に屬するこの地方には本庄や大國郷をはじめ散在耕地の買得寄進による入組んだ莊園が多い。かゝる奈良後期から平安前期にかけての莊園の構造乃至經營事情は最も難解な問題の一つであるが、本文書はこの問題を考えるために比較的都合のよい貴重史料であり、特に田刀川田堵についての最も早い所見の一つである。田刀は田堵などともかき、その實態については從來種々論議されているが、恐らく平安初期から鎌倉期にかけての有力百姓で、名主が名田の主として即ち権利者としての稱呼であるのに對して田堵は土地の預作人請作人として領主側から呼ばれた名稱であり、論理的には名田の前身であると云えよう。本文書によれば田刀前伊勢宰依知泰公安雄、田刀依知大富らの田刀川田堵と呼ばれるものが依智庄の庄田耕作の責任者であつたこと、又彼らが

領主への地子を對捍し、上田を中下田と稱し、庄田の一部を治田と稱して名田の基をなすと思われる私田を形成し、より有力な土豪などに耕地を寄進する等の田堵層の動向が窺われる。それは田堵百姓の擡頭であり、この動きを貞觀十八年(876)十一月二十五日付の愛智庄定文(東南院文書)以下同庄關係文書や赤松俊秀氏が明かにされた當時の大宰府における公營田經營と對比して考察するとき、一層はつきりと當時の農業經營乃至初期莊園の構造が理解出来るように思う。(本誌前號「平安時代の農民」參照―富川滿)

會員消息

本會理事長 原隨園博士は去る四月十九日横濱港を出發渡米され、米國各地の大學を視察の後七月八日に歸朝された。本會では會員有志の發起でさ／＼やかな歡迎會を開き博士からいろいろ興味深いおみやげ話をうかがつた。

【著書論文目録】(自一九五〇年五月至一九五〇年六月)

國史關係〔著書〕

日本佛教の創建者 三枝博音・服部之總外著

(B6・二六八頁・大雅堂・一八〇圓)

天皇 石井良助著(B6・二六〇頁・弘文堂

二二〇圓)

獄中手記―大逆事件記録第一卷―神崎 清編

(B6・五九九頁・實業之日本社・四五〇

圓)

神を助けた話 柳田國男先生著作集第一〇冊

(B6・二三〇頁・實業之日本社・二〇〇

圓)

幸徳秋水傳 糸屋壽雄著(B6・三一書房・

二〇〇圓)

〔雜誌論文〕

國史學 五二(五月)

紀伊國鞆淵庄における鄉村制形成過程

小川 信

日米通商條約の調印に関する一考察

藤井 貞文

鳥羽院の御素意―院政史の一節として―

民族學研究一四ノ四(五月)

〔特集・ルース・ベネディクト「菊と刀」の與えるもの〕

評價と批判

川島 武宜

日本社會構造における階層制の問題

有賀喜左衛門

日本語比較研究序説

J・ラーデル

マナと靈質

竹中 信常

清野博士の日本人種論に對する疑義

今村 豊

對馬の民俗に関する若干の覺え書

池田 次郎

アイヌの住居に関する若干の考察

三上 次男

史迹と美術二〇三(六月)

大和法隆寺寺杏葉唐草文軒平瓦一類

梅原 末治

日本上代彫刻の展開(二)

小林太市郎

〔特集・地藏菩薩像〕

藝林一ノ二(六月)

辻 彦三郎

古事記の成立(上) 宮座について

日本歴史二五(六月)

幕末の遣米使節たち

歴史と國民性との反省

歴史學に於ける傳記研究の意義

歴史評論 四ノ六(六月)

〔特集・日本古代國家〕

北九州と畿内

日本國家Ⅱ文化の起源に関する二つの立場

末開と野蠻

〔地方史〕三河國吉良庄

大谷學報二九ノ三・四

殺靈儀禮と神話

社會經濟史學 一六ノ二(六月)

澁澤榮一の經濟思想について

本百姓の一般に的的形成について(1)

文學 一八ノ六(六月)

〔特集・俳諧の研究〕

中世史としての蕉風俳諧

伊東多三郎

渡邊 義通

三上 次男

布村 一夫

久永 春男

三品 彰英

土屋 喬雄

藤田 五郎

平田 俊春

井上 頼壽

沼田 次郎

坂本 太郎

伊東多三郎

渡邊 義通

三上 次男

布村 一夫

久永 春男

三品 彰英

土屋 喬雄

藤田 五郎

西尾 實

俳諧成立の第一過程

浮世草子における俳諧性

「奥の細道」の一資料をめぐりて

俳諧における地方性

山形大學紀要 一(六月)

日清戦争の中國に及ぼした影響について

當時の中國人の時局論を中心として

羽後飛鳥の人口問題

埼玉縣熊谷附近の方言に遺る二、三の古語

思想 三一二(六月)

町衆の成立

經濟學雜誌二二ノ一・二、六月)

ウェーバーの初期の古代史研究について

早稲田商學 八六(六月)

徳川幕藩體制の構造とその解體

東洋文化 二(六月)

日本ブルジョア民主主義運動史

平野義太郎

廣末 保

森山 重雄

杉浦五一郎

栗林 農夫

佐藤 三郎

長井政太郎

田島 福重

林屋辰三郎

川久保公夫

入交 好脩

新中國年報第一集

中國研究所編(A5判)

劉小奇著川田好長編(B6判)

社會書房・九〇圓)

新しい中國—政治と經濟—中國研究所編(B6判)

一三三頁・岩崎書店・一〇〇圓)

中國研究所編(A5判)

月曜書房・二〇〇圓)

岩崎書店・四〇〇圓)

劉小奇著川田好長編(B6判)

社會書房・九〇圓)

新しい中國—政治と經濟—中國研究所編(B6判)

一三三頁・岩崎書店・一〇〇圓)

日本における宗教とファシズム

日本人の思维方法 報告 中村 元 討論

甘粕、山崎、山本ほか

東洋史關係(著書)

荆楚歲時記 守屋美都雄著(A5判・二四四頁・帝國書院・二八〇圓)

ソ連と中國(アテネ文庫) 貝島兼三郎著(六二頁・弘文堂・三〇圓)

中國の淨土教と玄中寺 道端良秀著(B6判・三二八頁・永田文昌堂・二〇〇圓)

東洋思想研究第四 津田左右吉編(A5判・三四頁・岩波書店・四〇〇圓)

中國共產黨組織論 劉小奇著川田好長編(B6判・一三三頁・社會書房・九〇圓)

新しい中國—政治と經濟—中國研究所編(B6判・一三三頁・岩崎書店・一〇〇圓)

新中國年報第一集 中國研究所編(A5判・二六一頁・月曜書房・二〇〇圓)

劉小奇著川田好長編(B6判・一三三頁・社會書房・九〇圓)

新しい中國—政治と經濟—中國研究所編(B6判・一三三頁・岩崎書店・一〇〇圓)

中國研究所編(A5判)

月曜書房・二〇〇圓)

岩崎書店・四〇〇圓)

劉小奇著川田好長編(B6判)

社會書房・九〇圓)

新しい中國—政治と經濟—中國研究所編(B6判)

一三三頁・岩崎書店・一〇〇圓)

中國研究所編(A5判)

月曜書房・二〇〇圓)

岩崎書店・四〇〇圓)

東洋畫の省略美

金都上京出土の宋錢

孟子と荀子の性説と教育説

國家學會雜誌 六十三ノ十、十一、十二(廿四年十二月)

「課役」の意味及び沿革

史學雜誌 五十九ノ四(四月)

漢代の循吏と酷吏

同 五十九ノ五(五月)

「匈奴」の國家

自然と文化 一(五月)

牡丹と芍藥—中國に於けるその沿革—

牧野文化園

乳をめぐるモンゴルの生態

人類學雜誌 六十一(二月)

極東及び東南亞細亞人の頭高に就いて

臺灣原住民(平埔族を含む)の人類學に關する文獻

説林・二ノ五(五月)

唐詩の文藝性

天理大學學報 一ノ二・三(廿四年十月)

村上 嘉賢

森 克巳

佐中 壯

滋賀 秀三

鎌田 重雄

護 雅夫

上野 實朗

中尾 佐助

梅棹 忠夫

島 五郎

須田 昭義

花房 英樹

德富蘆花と現代中國文學 (一) 中村 忠行

訓民正音の構成と變遷 齋藤 辰雄

聖經翻譯方法論考―新約華語を中心として― 志賀 正年

中國語の態表現について 鳥居 久靖

同 一ノ四 (五月)

原始農業の一課題―東南アジアの燒畑農業 古野 清人

陳文恭の五種遺規 石濱純太郎

抗日戦時の中國文學 服部 隆造

滿洲實錄文字攷―對譯蒙文にあらはれた

一二の異例を中心として― 山崎 忠

東洋學報 三十二ノ三 (四月)

哀牢夷の所屬に就て 松本 信廣

魏の東方經略と扶餘城の問題―高句麗に關する二征戰― 和田 清

晋王廣 (廢帝) の四道場 山崎 廣

宋代の長生牛 日野開三郎

明代における漕運軍士の就役狀態 (下) 星 斌夫

同 三十二ノ四 (四月)

宋代莊園の管理―特に幹人について― 周藤 吉之

南詔大理の遺民 (上) 牧野 巽

越史略と大越史記 山本 達郎

ヘーニツシユ教授譯註「元朝秘史」 小林海四郎

中國イスラムの經典 佐口 透

東洋文化 二 (五月)

西洋及び中國における帝王傳記 上原 專祿

アメリカの極東研究 山本 達郎

中國繪畫における庶民 米澤 嘉圃

西洋史關係 [著書]

經濟思想史 大河内一男著 (A5・二八七頁)

・勁草書房・三〇〇圓)

共和國 (上) ピアード著松本重治譯 (A5・三七三頁・社會思想研究會出版部・四八〇圓)

同地方價 (四九五圓)

現代民主主義論 ベッカー著石上・關譯 (B6・二〇〇頁・社會思想研究會出版部・一七〇圓)

イギリス資本と東洋 松田智雄著 (5・二八〇頁・日本評論社・四五〇圓)

〔雜誌論文〕

史學雜誌 五九ノ五 (五月)

一九四九年の歴史學界 (西洋史の部は太田・椋川・竹内三氏共同執筆)

經濟論叢 六五ノ四・五 (五月)

ルソー「經濟論」について 河野 健二

一橋論叢 二三ノ四 (四月)

アメリカ勞働法の發展 吾妻 光俊

ソリストイン・ヴェブレンとシカゴ大學 小原 敬士

同 二三ノ五 (五月)

アメリカのソ連研究 野々村一雄

同 二三の六 (六月)

ホップスと自然法思想 太田 可夫

ロックの自然法の性格 鈴木 秀男

アリストテレスの「プロトンプティコスについて」 藤井 義夫

人文地理學關係 [著書]

地理辭典 人文地理學會編 (B6・一四七頁)

・三明社・一二〇圓)

〔雜誌論文〕

人文地理 二ノ二(五月)

北米に於けるアングロサクソン植民の地理學的考察 帷子 二郎

農業雇傭労働に關する地理的研究 井關弘太郎

名家雜考 藤田 元春

九州の地名 近藤 忠

寒天製造業の地理的研究 樋口 節夫

吉備高原の土地利用 稻見 悦治

地理學史のこま 金子 廉

大阪平野低濕地の土地利用 藤本 利治

統計上より見たるアメリカ水運の現況 山口平四郎

コスタ・リカのパナナ栽植地域の移動 三上 正利

セイロンの茶葉 織田 武雄

自然と文化 一(五月)

F. J. Clements—その學說の批判 今西 錦司

農業林業の北限及び馴鹿飼養の南限などを劃する氣的境界線について 川喜田二郎

被麥文化圈——穀類の品種那から見た東北アジアに於ける新しい一つの文化類型—— 中尾 佐助

乳をめぐるモンゴルの生態——梅棹 忠夫

地理學評論 二三ノ二・三・四・五(五月)

宇治茶の勞働力の特色とその季節的移動 谷岡 武雄

日本における赤痢の疾病地理學的研究 堀口 友一

昭和二四年度日本地理學會臨時總會記事並に秋季學術大會研究發表要旨

新地理 四ノ六(六月)

大和に於ける二つの特殊な灌漑用水權とこれを廻る村落社會の構造の特性(一) 喜田村俊夫

米食・稻作・農村社會——米の人文地理學的考察—— 堀内 義隆

米食・稻作・農村社會——米の人文地理學的考察—— 山口彦一郎

考古學關係〔著書〕

日本美術略史〔改訂新版〕國立博物館編(B 5・本文二五〇頁・圖版八五頁・便利堂・四五〇回)

大和の古墳 末永雅雄著(B 6・三〇三頁・河原書房・二五〇四)

民族學の基本問題 石田英一郎著(6・二一九頁・北隆館・一八〇四)

Encyclopédie Photographique de l'art Le Musée du Carné 1949, France

世界美術全集 第五卷 ギリシア(1)(B 5・圖版一三〇頁・解説一五〇頁・平凡社・並製本五〇〇・同上製本六八〇四)

人文研究 一ノ五(五月)

三時期法批判 角田 文衛

歴史評論 四ノ五(五月)

繩文式文化について(其の一) 江坂 輝彌

同 四ノ六(六月)

繩文式文化について(其の二) 江坂 輝彌

北九州と畿内 渡邊 義通

日本國家II文化の起源に關する二つの立場 三上 次男

未開と野蠻 布村 一夫

三河國吉良庄 久永 春男

史林 三三ノ三(七月)

〔雜誌論文〕

世界美術全集 第五卷 ギリシア(1)(B 5・圖版一三〇頁・解説一五〇頁・平凡社・並製本五〇〇・同上製本六八〇四)

人文研究 一ノ五(五月)

三時期法批判 角田 文衛

歴史評論 四ノ五(五月)

繩文式文化について(其の一) 江坂 輝彌

同 四ノ六(六月)

繩文式文化について(其の二) 江坂 輝彌

北九州と畿内 渡邊 義通

日本國家II文化の起源に關する二つの立場 三上 次男

未開と野蠻 布村 一夫

三河國吉良庄 久永 春男

史林 三三ノ三(七月)

東亞に於ける銹帶金具とその文化的意義

樋口 隆康

日本上代彫刻の展開 (二)
二〇四號 (七月)

小林太市郎

古墳時代における文化の傳播

小林 行雄

同 壇輪

末永 雅雄

日本歴史 二五號 (六月)

水野 清一

日本上代彫刻の展開 (三)
日本正倉院の生蓮 (上)

田中 重久

對馬に於ける考古學的發見

美術史 第一冊 (六月)

廣惠寺花塔の一解釋

村田 治郎

人類學輯 報第四輯 (六月)

鈴木 誠

戰後歐米刊行の東洋陶磁文獻
Benjamin Rowland; The Hellenistic Tradition in Northwestern India (The Art Bulletin vol. XXXI-1 1949)

廣島縣下箱式棺出土の骨に就いて

池田 次郎

B. Rowland; Gandhara and Early Christian Art: Buddha Palliatus (American Journal of Archaeology vol. XLIX 1945 No.4)

小山富士夫

長野縣海善寺古墳人骨の齒牙

大附 勝敏

民族學研究 一四ノ四 (五月)

清野博士の日本人種論に對する疑義

今村 豊

池田 次郎

同 二〇二號 (五月)

古代施釉窯器の新資料

梅原 末治

備前燕山戒壇出土品その他

同 二〇三號 (六月)

日本上代彫刻の展開

小林太市郎

大和法隆寺杏葉唐草文軒平瓦一類の復原

同 二〇三號 (六月)

梅原 末治

次號目次 (三三ノ六)

北陸門徒の關東移民 五來 重

ヨーロッパ集落の生蓮
——集落と耕地の社會的機能—— 水津 一朗

ジョン・デイツキンソンの
えらんだ道 今津 晃

宗代解州官營鹽業の構造
——その支配と隸屬について—— 池田 誠

前號目次 (三三ノ四)

中世の世界圖に就いて 織田武雄

平安時代の農民——特に
田堵・名主について—— 宮川 滿

シナ中世貴族政治の
成立について 川勝義雄

古墳時代における
文化の傳播 (下) 小林行雄

史學研究會

例會 五月二十九日 午後三時—午後五時

於京大文學部第一教室

老莊の自由思想

村上 嘉實

福建人の海上活動と媽祖信仰の傳播

小葉田 淳

講演會及び見學

六月廿四日 午後一時—午後五時

於彦根市滋賀大學經濟學部

世界史の構造

田村 實造

會場満員のため、途中で會場を變更するなど、豫想外の盛況に主催者側が當惑する程であり、講演後、座談會に移つてからも、滋賀大學、縣下高等學校中學校の先生達から、學問的な、或は教育の實際に即した切實な質問が重ねられた。

その後、非伊家の千松節に向い、幕末の政治、經濟、外交などに關する未公開の貴重な新史料を展觀していただき、非伊大老史實研

究會の末松修氏の解説を受けながら、參會者一同、有意義な見學を終つた。

京都學藝大學關係

史學會發會記念講演

昭和二十五年七月八日 於紫郊會館

古代村落と宗教意識 (府下式内社に於ける) 本學教授 志賀 剛

秦の始皇帝とその時代

京大教授 森 鹿三

師範學校時代の「史友會」と昨年秋季以來の「京都歴史教育研究會」との兩者が發展的解消を遂げて學藝大學史學會が今回新しく發會したに際し、記念の爲、右の如く公開講演會を開いた。學の外より當日集りたる聴衆は約二百名、會場の廊下に溢れ出るの盛況であつた。初めに會則案を審議決定の後、講演に移つた。終了後、座談會を開き、森教授を中心に、當日參加された京都女子大、橋川時雄氏等をまじえて終始熱心な討論質疑が行われた。

因みに學藝大學史學會では史學教育を中心

として歴史地理研究第一輯「京都と文化」を白井書房より發刊した。執筆者と論題次の如し。山城の先史文化(小江慶雄) 古代村落と神社(志賀剛) 近世農村の生活(高島清香) 近代中國學生の二側面(荒木敏一) マルクス主義美術史論批判(中村二柄) 來年、第二輯續刊の豫定である。

大阪歴史學會

昭和廿三年一月大阪歴史談話會として發足して以來堅實な發展を續けて來たが、廿四年十月從來の學究のみの會を發展擴大して地方史家を含めた會とし、十二月には史學研究會と共同の例會を開催するに至つた。メンバーの大部分は大阪近傍の學校に奉職する東大、京大兩文理大出身者であるが、文化的學究的な雰囲気、勢い大阪の地に正しい歴史研究の傳統を建設すべく一般公開講座として本年までに、古代、中世、近世、現代史講座を開催し、學生部を設けて各高等學校史學班に呼びかけ、庶民史料調査に關聯してその研究部を設ける等一般にも働きかけている。本年一月よりは會報を發行し例會發表の原稿及び彙報

を掲載している。(會場、大阪學藝大友松會館)

○昭和廿三年十月 古代文化講座

天智紀法隆寺罹災の記事について

大阪大助教授 井上 薫

正倉院隨想 大阪一師助教授 八田 英次

登呂遺蹟と唐古遺蹟 京大講師 末永 雅雄

○昭和廿四年五月 中世史講座

中世寺院の行政方式について 津田 秀夫

大阪一師助教授 津田 秀夫

中世の聚落 大阪大教授 村松 繁樹

中世社會の性格 大阪大教授 藤 直幹

○昭和廿四年十月 近世史講座

近世日本に於ける考古學の萌芽 小林 行雄

近代日本畫の普遍性 望月 信成

近代史の諸問題 山根徳太郎

本年一月以降の例會

一月 環濠聚落の研究 敬傍高 堀部日出雄

二月 奈良晒布の生産機構

奈良學藝大 奥田 修三

北魏淨土教の成立

三月 世界史上に於けるヨーロッパ成立の意義 天玉寺高 善峰 靈雄

浪速大 天川潤次郎

四月 大阪に於ける自由民權運動 大阪學藝大 鈴木 祥造

元東の大亂 同 寺廣 映雄

五月 現代史講座 新らしい中國とその歴史的發展

大阪學藝大 北山 康夫

明治維新と人民の動き 大阪大 石井 孝

現代と國際主義 大阪大 猪谷 文臣

六月は本會最初の大會を開催、ついで總會をひらいて本年度の委員を決定した。

(委員主任) 石井孝(企畫) 北山康夫、井上薫(渉外) 吉田恒夫、善峰靈雄(會計) 津田秀夫(編集) 酒井忠雄、岡崎精郎

五月十三日(第三十六回例會) 原始漁村の生活——家舟を中心として——

五月十七日(第三十七回例會) 心理學における自然條件と文化條件

六月十七日(第一號が發刊された、(既刊

論語の成立 貝塚 茂樹

元遺山の詩論について 鈴木 虎雄

東方學會

京都支部第七回講演會 五月七日

論語の成立 貝塚 茂樹

元遺山の詩論について 鈴木 虎雄

東方學術協會

五月廿四日 大阪例會

漢詩の鑑賞 神田喜一郎

六月十五日 京都例會

梅雨について 柴田 淑次

支那學會

例會 六月十七日

記述と創作

中國史上に於ける征服王朝について 前野 直彬

梁の武帝 佐藤 長

森三樹三郎

自然史學會

五月十三日(第三十六回例會)

原始漁村の生活——家舟を中心として—— 吉田 敬市

五月十七日(第三十七回例會)

心理學における自然條件と文化條件 菅阪 良二

六月十七日(第一號が發刊された、(既刊

論語の成立 貝塚 茂樹

元遺山の詩論について 鈴木 虎雄

日本史研究会

例會 四月十八日(土) 後一時

立命大文學部 第八教室

「現代画壇の潮流」

内田 巖

今月は藝術史部會の發表として、はる／＼東京からみえられた民主画壇の長老内田氏をかこみ、氏獨特の風格ある回顧談に集會者一同ふかい感銘をうけた。

大會 五月二十日(土) 後一時

立命大文學部 第八教室

「平利問題と歴史教育」

藤間 生大

松島 榮一

北山 茂夫

來會者は會場をうずめる盛會であつた。なおこの會で日本史研究会の名による「平利に關する聲明」が満場一致で可決され、百名をこえる署名をえた。講演會後總長公室で講演者をかこみ夕食をともにしながら懇談會がもたれ、なごやかに會をとじた。なお「平利に關する聲明」はプリントされ、全國の關係學會その他へ送られた。

例會 六月十七日(土) 後一時

立命大日本史研究室

「歴史學の動向」

里井彦七郎

高尾 一彦

北村 敬直

井ヶ田良治

先月末に東京でおこなわれた歴史學研究會大會の研究發表について同會出席者の要旨報告がおこなわれ、さらにそれについて活潑な討論がおこなわれた。

立命館大學日本史研究室

研究旅行 五月三十日(火)

午前九時に京津三條驛集合。石山寺より

宇治川ラインを下り平等院を見學して解散

奈良本教授・岩井講師以下約三十名参加。

史料探訪旅行 六月十六日(金)

午前九時京都驛發で龜岡に行き、同町馬

堀の山田家所藏の農村文書約二百點を探訪

した。奈良本・林屋教授・前田講師をはじめ學生約三十人が参加した。

なお、べつに當研究室は奈良縣二上郡金谷

村に農村史料探訪を行い、同村の舊庄屋喜多

家の所藏文書(寛文元年——明治八年)六十

通を調査した。同文書はその後喜多家の好意

によつて當研究室の所藏に歸した。

また奈良本教授の發見によつて攝津國西成

郡木津村文書(享保元年——天保十一年)一

二五通も、當研究室の所藏するところとなつ

た。同文書は特殊部落研究に重要な寄與をな

すものである。

立命館大學地理學同級會

野外調査 六月二十一日

山中越・大津京址・西滋賀貝塚・水耕農場

例會 六月三十日

アルペール・ドゥマンジョン氏の生涯とそ

の業績 谷岡 武雄

日野商人團の交通路 樋口 節夫

濃尾平野の先史地理に關する一試論 伊藤 安男

人文科學研究所

公開講座 五月六日 於京大文學部第一教室

近世的諸契機の發展について 河野 健二

農業の恐慌論について 安達 生恒

中國に於ける農業技術の確立過程

天野元之助

より史學科第二教室において左の研究發表を行つた。

疑應答が重ねられ、五時半散會した。出席者十四名。

京大國史關係

讀史會春季大會 六月十日(土)午後一時より京大圖書館會議室において本年度春季大會を開催。次の研究發表と各々についての質疑應答があり、五時過ぎ盛會裡に閉會した。參會者小葉田・柴田教授以下先輩學生等約六十名。

より史學科第二教室において左の研究發表を行つた。

京大東洋史關係

羽田亨博士還曆記念「東洋史論叢」完成

開會の辭 小葉田教授 備中國勇騎押出濱における小作遺子の經濟生活——瀬戸内鹽業の史的研究

羽田亨博士還曆記念「東洋史論叢」完成 かねて東洋史研究會に於て計畫中の同論叢がいよ／＼完成した。本論叢は博士の知友、門下生四十三名の勞作を収めた、千頁を越える、まさに東洋史學界の輝かしい金字塔である。極めて困難な出版事情を克服して本書が刊行された事は學界に多大の貢獻を與えるであらう。

近松世話物の研究 自由民権と中江兆民 中世の村落と宮座 土一揆について 近代文化の形成と素描 我が國に於ける大般若經信仰について

東洋史談話會 例會 六月十九日 交趾支那の初期開發について 藤原利一郎

民俗學會例會

河出 龍海氏 黒上正八郎氏 山口 光朝氏 黒田 俊雄氏 井ヶ田良治氏 石澤 澈氏 五來 重氏 柴田 教授

六月廿一日(水)午後一時より京大陳列館會議室にて開催。まず大學院學生河合正通氏が「民俗學の諸問題」と題し、初學者の入門のための手引の意を兼ねて所見を述べられ、次いで法學部猪熊兼繁教授より「能登の海女について」なる題のもと、原始法の研究のため現地で親しく採集された能登船倉島の民俗についての報告があり、これをめぐつて種々質

京大西洋史關係 西洋史讀書會 第二回例會 五月廿五日 於史學科演習室 P. Vinogradoff: The Growth of the Manor A. Schaub: Die Wollaustrich

閉會の辭

讀史會六月例會 六月廿八日(水)午後三時

閉會の辭

川浦 治

Englands vom Jahre 1273 川口 博

第三回例會 六月十二日 於史學科演習室

Ehrenberg : Das Zeitalter der

Fugger Bd. I. 瀬原 義雄

Tit. Rogers : History of Agriculture

and Prices in England 佐久間 進

第四回例會 六月二十六日 於史學科演習室

C. Stephenson : Borough and Town,

the Study of urban origins in

England, 1933 小川與四郎

Harnack : Mission und Ausbreitung

Des Christentums

Kautzky : Der Ursprung des Christen-

tums 田淵 保雄

京大人文地理學關係

地理學談話會 六月例會 六月三日(土)

午後二時。地理學實習室。

一、日本の集落の歴史的發展

——その地名學的探究と意義 鏡味 完二

一、中世の世界圖の特色 織田 武雄

七月例會

七月一日(土)午後一時。地理學實習室。

一、經濟地理學の方法について

春日 茂男

一、Torunara の源流 藤岡謙二郎

史學研究會地方委員(順序不同敬稱略)

京都市

野上 俊靜

小笠原宣秀

藤枝 晃

伊藤 道治

荒木 敏一

中村 二柄

村上 嘉實

谷岡 武雄

石田 一良

村山 修一

大阪府

外山 軍治

岡崎 精郎

直木孝次郎

寺廣 映雄

太田 通昭

善峰 憲雄

横田 健一

兵庫縣

八木 法忍

佐藤 長

和歌山縣

中谷 英雄

廣實源太郎

奈良縣

岩城 隆利

池田 源太

山崎 忠

滋賀縣

宮川 滿

原山 淑夫

岡山縣

河野 通博

石田 寛

廣島縣

時野谷 勝

山口縣

小畑 龍雄

鳥取縣

大谷榮之助

鳥根縣

神戸高校

神戸大學

和歌山大學

桐蔭高校

和歌山大學

奈良女子大學

奈良女子大學

奈良學藝大學

天理大學

滋賀大學

滋賀縣廳

岡山大學法文學部

岡山大學教育學部

廣島大學

山口大學

鳥取大學

鳥取大學

鳥取大學

鳥取大學

鳥取大學

鳥取大學

鳥取大學

鳥取大學

| | | | |
|-------|----------|-------|-----------|
| 香川縣 | 香川大學坂出分校 | 富山縣 | 富山大學 |
| 山本 隆義 | | 高瀬 重雄 | |
| 高橋 邦彦 | 大野原中學校 | 長野縣 | 信州大學 |
| 愛媛縣 | | 三蓋田熊藏 | |
| 藤野 彪 | 愛媛大學 | 長崎縣 | 長崎大學 |
| 高知縣 | | 鳥谷 通宏 | |
| 山本 守 | 高知大學 | 東京都 | 東京大學 |
| 徳島縣 | | 尾藤 正英 | 東京大學 |
| 田中 勝藏 | 徳島大學 | 櫻井徳太郎 | 東京教育大學 |
| 福岡縣 | | 清水 潤三 | 慶應大學 |
| 岡崎 敬 | 福岡中央高校 | 福永 忠一 | 専修大學 |
| 佐賀縣 | | 奥野 高廣 | 東京大學史料編纂所 |
| 米倉 二郎 | 佐賀縣立圖書館 | 宮城縣 | |
| 静岡縣 | | 愛宕 松男 | 東北大學 |
| 内藤 晃 | 静岡大學 | 岩手縣 | |
| 愛知縣 | | 草間 俊一 | 岩手大學 |
| 林 章 | 名古屋大學 | 山形縣 | |
| 野村 政光 | 岐阜縣廳 | 柏倉 亮吉 | 山形大學 |
| 岐阜縣 | | 北海道 | |
| 日置彌三郎 | 岐阜大學 | 護 雅夫 | 北海道大學 |
| 石川縣 | | | |
| 小竹 文夫 | 金澤大學文學部 | | |

日本歴史學協會の成立

一昨年秋京都において人文科學委員會主催

の歴史學大會が催された節、關係者の間にわが國の全歴史研究者を包攝する總合統一學會設立の要望がはじめて表明され、委員會全員の賛成を得て直に準備委員を選出し、會則の要項を立案することとなつた。當時の一般の意向では國史、東洋史、西洋史各分野に於いてそれぞれの學會を組織することに傾き、そのあるものは一應、東京、京都兩方を通して會則の草案を決定するまでになつたものもあつたが、その後昨年の夏に至り一部有志の間にそのような研究分野を分つことなく廣く全歴史學界の統一を計ることの必要が強く主張せられるようになつて、漸次多數の賛成を得、改めて有志の間に協議會が開かれることになつた。

その會には既存の主な學會並に研究機關から非公式ながらその代表者が出て懇談を重ねたのであつたが、新に成立すべき學會が個人單位のものであるか、はたまた既存學會を單位としたその連合の如きものであるべきかに關して容易に議がまとまらず、幾度かの會合も何等の成案をえずして終つた。偶々昨年十二月、日本學術會議第一部史學部門が、文部

省科學研究費の配分を審議するに當つて諮問すべき委員の選定を、主な大學と學會とに依頼したのを機會に東京に會合したそれら大學及び學會代表者等は、既往の有志懇談會のいきさつを一應放棄して自ら新に假稱日本歴史學協會創立發起人となり、その成立に至るまでの諸事の幹旋を舉げて學術會議第一部史學部門の議員に依囑することにした。そこで彼等は準備世話人會を組織し、新に發起人たるべきものを追加、總數八十餘名を得て、去る三月廿五日、日本學士院において發起人總會を開いた。然るにその席上、會の性格とその運営方針に關し重大な疑義を生じて議がまとまるに至らず、僅に基本原則の承認と正式委員決定までの代行臨時委員を選出したのみで流會となつた。その後臨時委員の間では幾度か會議を重ねてききの會則案に全面的な修正を加えていたが、漸く新しい草案が得られたので、別途の有志案と共に去る七月八日午後早稻田大學文學部において第一回總會を開きこれを審議した。そこで本會からは前回以來毎回會議に出席している田村・柴田兩評議員及び井上評議員の代理として前川貞次郎氏、

宮崎評議員代理佐伯富氏が出席し、大要左記の如き會則を承認し、委員選舉に當つては個人委員二十名中、井上、貝塚、田村三評議員が當選、委員を推薦しうる學會の選舉に於いては本會は第二位に當選したので、その後評議員會の議を経て小葉田淳、直木孝次郎の二氏を推薦することになつた。

會則の概要

(目的及び事業) 本會は歴史學の向上發展に寄與することを目的とする(第三條)。前條の目的を達するために歴史學に關する研究者及び學會、研究機關相互間の連絡を圖り、歴史學界に關する重要事項を審議しその實現を期し、又國際的に學術の交流を圖るための事業を行う(第四條)。

(會員) 本會の會員は左の各號の一に當るものでなければならぬ。一、歴史學に關する研究論文若しくは編著書を有するもの、二、修史若しくは研究の機關に所屬し業績のあるもの、三、右の各號に準ずるもの(第五條)。會員となるには本人が申込み若しくは會員二名以上の紹介により、本會の委員會の承認を経ることを要する(第六條)。

(總會) 總會は毎年一回定期に開く(第八條)。最高決議機關である(第十二條)。

(役員及び委員會) 本會に左の役員をおく一、委員四十名 内七名常任委員、二、監事二名(第十五條)。委員は左の規定に従つて會員の中から選出し又は推薦する。一、總會の選舉によるもの二十名、二、總會の投票によつて決定する十五の學會から推薦されるもの二十名(第十六條)。

編輯後記

史林三三卷五號の編輯にあつて從來よりも少しくおもむきを變えた點は口繪の解説にやゝ大きい場所をとつたことである。これは第六號以下に新しく掲載を豫定している「史料紹介」への含みもあるからである。尙史林の「書評欄」において紹介批評すべき著書或は論文を會員諸氏から編輯係の方へお報らせ願いたく存じて居ります。會員諸氏が御自身で書評を御投稿下さつても結構ですし、或は著書名だけお報らせ下さつても結構です。その際は編輯係の方で適當な方に依頼申上げて執筆していただきます。(星田輝夫)